資料解題

稲取実験婦人学級コレクション
――「主婦」たちの学習記録――

矢口悦子

本コレクションは、文部省が1954（昭和29）年度から56（昭和31）年度にかけて実施した稲取実験婦人学級（正式には社会学級であるが、ここでは一般的な呼称を用いる）に関連する第1次資料を中心に構成されている。資料のほとんどは、当時文部省の担当官として実験学級の開設に関わった塩ハマ子氏によって収集されNWECに寄贈されたものであり、総件数約150点となる。そのほかに、文部省からの依頼で本学級の開設に助言者として関わった三井為友氏（当時東京都立大学教員）の所蔵資料（現在は木全力男創価大学教授によって保存されている）約40点をデジタル撮影し、画像を入手することができた。さらに、東伊豆町における当時の学級生（中村みつ、齋藤芳乃、嶋津好江の各氏）へのヒアリング調査（2007年9月）の際に、嶋津氏によって支部長としての学級の記録簿が保存されていたことがわかり、それもデジタル化された。

資料の内容は、1.準備過程関連資料、2.各年度の学級の学習課程表および記録類、3.終了後のまとめ、4.当時の他地域関連資料等、に分類することができる。以下では、それぞれの具体的な中身について、概要を説明することにしたい。

1.準備過程関連資料

学級の企画は1954（昭和29）年12月に急ピッチで進められていたことを示す複数の資料がある。12月8日に稲取町で行われた第1回の打ち合わせ関係資料として、当時の稲取町の状況、それ以前の婦人学級・女子青年学級などの実態についてのデータ類が稲取町側から準備され、さらに受講希望者の実態調査も実施されている。同時に、文部省側では、「学習課程表」を準備し、年末には町に原案が提案され、了解を得られている。翌1月10日文部省から横山宏、塩ハマ子両担当官が来町、同月23日は学級が開設された。関係者の手紙なども保存されており、アーカイブ資料をパズルのように並べ替えると、このプロセスが鮮明に浮かび上がってくる。

2.各年度の学級の学習課程表および記録類

本コレクションの中心は、参加者たちによって残された手書きの学習記録類にあるといっても過言ではない。学習課程表は、各年度とも複数パターンが残されている。これは、事前に配布されたものと、学級のあとに文部省に報告するために作成された実績ベースのものなどがあることによると思われる。

大量の学習記録類は、地区ごとに日誌のような形態で綴じられたもの、特別な課題に伴って出された宿題やアンケートへの回答類、学習の成果をまとめた図表類などがあり、頻繁に文部省へも報告がなされていたことがわかる。1年次は、一日の生活時間調査や「昨日一日をどう過ごしたか」というタイトルの宿題を学級生が提出しており、鉛筆などで書き込まれた原資料が残されている。学級終了後に、同様のタイトル「私は昨日一日をこうして暮らした」が作成され、教育委員会事務局によってガリ版刷りで「生活作文」および「生活作文集」として編集されたもの、さらに『主婦の生活つづりかた』とのタイトルの活字印刷版も作成されている。これらは、その内容から、学級後に婦人会を通じて学習が継続され、まとめられたのではないかと推察される。複数バージョンが残されていることの意味など、新たな研究の課題が生まれた。このほか、1年次の学級の記録としては、先述の宿題をもとに作成されたと考えられる生活時間調査の図表や家計調査、支出

の調査の図表なども現物が良好な状態で保存されている。

2年次は、やや記録が少ない。グループごとに、地域の産業に応じて農業または漁業に関わる詳細なデータが調査によって得られている。また、子どものしつけの問題や電気の使用料などのテーマに取り組んだグループもあった。調査結果を大判のグラフに作り上げた資料は、鮮明な色を留め、すばらしい状態で保存されているが、1年次のような学習記録類は少なく、今後発見される可能性に期待したい。

3年次にあたる1956（昭和31）年度は、引き続き「生活を見つめ、生活を高めよう」との全体目標のもと「稲取町の足どりをしらべましょう」という具体的課題が設定された。2年次同様、グループによる調査とそれをもとにした話し合い学習が中心となる。グループによる活動は地域の集会所である公民館や婦人会のリーダーである支部長や副支部長の個人宅でも行われ、グループごとの運営は積極的に受講生によって担われた。時間は、週2回夜の7時から10時までと活動日はこれまでより少なくなるが学習時間が3時間になっている。

受講者は129名、年齢層としては40歳代が62名と約半数、続いて30歳代の36名、50歳代の23名、その他10名であった。職業は漁業33名、農業39名、商工日雇など57名となっている。

グループは前年度よりさらに枝分かれをし、12グループが活動を展開した。係はこれまで同様、記録、生活、世話、レク、広報となっていた。各グループでの学習テーマは、自主的な会合によって決定され、宗教の歴史（神教、仏教）、温泉の歴史、農民の暮らし、母の会の歩み、人口動態、衣生活の歴史、教育の歴史、子供の生活の歴史、青年の暮らし、住生活の歩み、漁民の生活、天草の歴史であった。

それぞれが、町の老人宅を訪問し、徹底的な聞き取り調査を実施した。このことが、高齢者たちとの交流となり、楽しくもあり後の生活に役立ったとの評価がなされている。しかしながら、この調べ学習の過程は非常にハードで、特に、支部長など学級の役員にとっては大きな負担でもあり、責任感で乗り切ったという話を聞くこともできた（2007年9月）。

以上、参加した女性たちが夜なべ仕事で書き残したとされる（インタビューより）記録類は、今まで分析されたことがない貴重な第1次資料である。

3. 終了後のまとめ

町の教育委員会によって編纂された『社会学級の歩み』が全体の記録としてしばしば引用されてきた。これらを通じて描かれてきた「稲取実験婦人学級」の像と、今回のアーカイブ構築によって確認された第1次資料によって浮かび上がってくる学級の実像との間には、いくつかの点で距離が認められる。特に、学級生による手書きの資料の分析が、この距離を埋めてくれるのではないかと考えられる。

また、3年次の学習のまとめを中心にして重要な記録が残されている。婦人学級研究集録『町の歴史』（1958〈昭和33〉年2月）、である。具体的な内容としては、町の人口のうつりかわり、住いの歴史、衣生活の歴史、子供の生活の歴史、漁業の歩み、天草について、農家の暮らしの歴史、宗教の歴史、神社の歴史、温泉の歴史、教育の歴史、婦人会の歩みとなっている。

「編者あとがき」で三井為友氏は「この本は日本でもはじめての、いや、世界でもはじめての、家庭の平凡な主婦が書いた郷土の歴史の本です」とし、誇りをもって子孫に残したい、そして「より美しい明日にむかって手をつないで歩こうと思います」と結んでいる。

なお、この『町の歴史』は平成16年に、東伊豆町文化協会発足25周年の記念事業の一環として復刻版が発刊された。後日談ではあるが、実際に書いた女性たちは、その原稿を指導者であった鈴木萬治校長先生（社会教育委員の代表を兼ねる）に届けたが、そのさきこのような本の形で出版されたものがあることをほとんど知らなかったという。平成16年の復刻本を見て初めてほかの地域の女性たちがどのような調査をしていたかを知り、その内容に感動したとの話が聞かれた（前述インタビューより）。限られた部数の出版であり、執筆した当事者の手元まで行き渡らなかった当時の事情が垣間見えるエピソードである。復刻された『町の歴史』は個人情報の問題などいくつか検討する課題を含んではいるが、その内容の広さと深さに驚かされるものであり、地域史として貴重な記録となろう。同時に、本コレクションに収められている各文章のもとになった学習活動の記録が、再び研究調査の対象として光を当てられることになると考えられる。

4. 当時の他地域関連資料

コレクションに含まれるほかの地域の資料をどのように解釈するかは議論の分かれるところであろう。しかし、本学級が全国の婦人学級を振興するためのモデルケースとして実験されたという事実に照らしてみれば、当時の地域婦人教育の実態や、同時に指定されたほかの実験学級に関する情報などは、傍証資料としての価値をもつと考えられる。

以上、稲取実験婦人学級コレクションの全体像と、主な内容について述べてきた。各年度の学習課程表は文部省が各地の研修会などで、広く紹介し、また文部省から依頼されて関わった研究者によって東京都の研修会をはじめとして各地の研修会で活字となった研究論文を通じて紹介されてきている。しかし、以上紹介したような第1次資料による詳細な分析を経て、学習課程表のもつ意味も再評価されることになろう。

さらに、第1次資料が保存されることで、さまざまな研究への可能性が生まれる。文部省にとっての「実験」とは何であったのかを、町と文部省との資料のやり取りや担当者の手紙文などを通じて分析することも可能であるし、一般に「主婦の話し合い学習」の出発点として紹介されてきた本学級についての根本的な評価も、もう少し肉付けされるのではないだろうか。すなわち、実際の学習は生活改善を目指した「調査学習」の比重が大きいことと、発表や記録を作成する努力が非常に大きかったこと、主婦とは言うものの、農漁村の若妻としての立場にあった主婦たちの生活は、肉体労働と家事、育児におわれるかなり厳しいものであり、学級が1、2月の農閑期、漁閑期の夜に行われたことなどから、婦人学級自体のイメージが変わるのではないかと予想される。そして何よりも、学習者によって作成された各種記録や学習成果物が何を物語っているのか、研究の可能性は広く開かれている。

付記：当時の学級生へのインタビュー調査の記録もアーカイブ資料に加えることができると思われる。対象となった学級生は前述の通りであるが、ほかに、鈴木萬治校長先生の孫にあたる鈴木啓史氏、東伊豆町文化協会の梅原好代会長、石原典子氏、東伊豆町教育委員会の矢代幸一氏、鳥澤幸子氏の参加があった。インタビューは野口真代、常葉-布施美穂と筆者が行い、撮影はNWECの森田美由紀が担当した。

（やぐち・えつこ　東洋大学教授）